



京都の宮廷文化と 双京構想の歴史的意義

◆ 双京構想推進検討会議 ◆
(京都府・京都市・京都商工会議所)

基調講演

京都の宮廷文化と
双京構想の歴史的意義



京都産業大学名誉教授
所功氏

時代祭の行列は桓武天皇ご神幸の先触れ

京都の三大祭に数えられる時代祭は、毎年10月22日を中心に開催されます。平安京が造営された延暦年代から幕末維新に至るまで、各時代の面影を偲ぶことのできる衣装をまとう総勢約2千人の行列は、いわば動

く時代絵巻として、国内外の観光客からも大変好評を博しています。

しかし、そもそも時代祭はどうして始まり、行列はどんな意味を持っているか、あまりよく知られていないようです。これは今日のテーマに

関係することですから、そのおさらいをしておきたいと思います。

祭儀の日程は、21日に前日祭、22日に神幸行列と行在所祭（あんざいしよさい）と還幸行列が続き、23日に後日祭が行われます。その22日に行われる時代祭は、単なる仮装行列ではありません。

これは平安神宮の大祭の一部分です。そのご祭神は、平安京を造られた桓武天皇と、幕末に京都で生涯を閉じられた孝明天皇です。

午前7時、平安神宮でその二柱のご神霊が御鳳輦に遷されます。ついで9時ごろ京都御所に参ります。それが神幸行列です。

さらに10時半、御苑の建礼門前で行在所祭が執り行われます。ここで時代風俗行列と合流して、12時に建礼門前をたち、午後3時ごろ平安神宮に還られます。これが一般に時代祭と称される還幸行列です。

すなわち、桓武天皇と孝明天皇の



御神霊を乗せた御鳳輦は、平安神宮から京都御所へお出ましになり、御所から街中をご巡幸行になって、再び平安神宮へお戻りになるのです。

従って、あの行列で一番重要なのは最後の二基の御鳳輦でして、その前の各時代の風俗行列は先触れとしてお供するものにほかなりません。

明治天皇の叡慮により復興した京都の大礼

わが京都は、8世紀の終わり（794年）から1千年以上にわたり名実ともに「ミヤコ」でした。ミヤコとは、天皇の宮殿（ミヤ）のあるところ（コ）という意味であり、日本の首都にほかなりません。

ところが、明治の初め（1769年）、天皇が新政府とともに東京へ遷つてしまわれましたので、京都は急にさびれてしまいました。明治10年（1877年）、そのような京都へお越しになった明治天皇は、大変に心配され、これを何とかしなくてはいけないとお考えになり、翌11年、重要な提案をされます。

その際にヒントを提示したのが、

元老院議員で、西南の役に勅使を仰せつかった柳原前光（さきみつ）です。彼は、明治天皇の側室として後の大正天皇（嘉仁天皇）を生んだ柳原愛子（なるこ）典侍の兄にあたり、早くから外務省に勤め、後にロシア公使なども務めています。

そのロシア帝国では、当時の都はペテルスブルグでしたが、皇帝の即位の戴冠式は古都のモスクワで行われていました。そこで柳原は、明治に入つて首都は東京となったが、皇室儀式の中で極めて大事な即位礼や大嘗祭は京都でなさつたらどうでしょうと進言したようです。それを聞かれた明治天皇は、ロシアを参考

にして、日本でも将来の即位礼や大嘗祭を京都でやれるようにしてほしいと仰せられました。

そのお言葉を承つて、関係者がいろいろと検討した結果、明治22年（1889年）制定の「皇室典範」の中に、新天皇の即位礼と大嘗祭は京都において行うことが明文化された。それにより、天皇の御代代わりで一番重要な儀式が再び京都で行われることになり、京都の人々は大いに元氣を取り戻したのです。

その上、数年後の明治27年（1894年）は、平安遷都から1100





年の節目にあたりますので、その翌年に行われる予定であった政府主催の内国勧業博覧会を、記念事業として京都で開催にしてほしいと政府に要望し、幸い決定されました。

そこで、博覧会を開催するならば、いわばメインパビリオンとして、平安京を造られました桓武天皇をお祀りする神宮を建立するアイデアが出され、それが官幣大社の平安

神宮として実現したわけです。

しかも、この神宮創建に際し、初めはアトラクションとして行われたのが、先にお話した各時代の風俗行列、いまに至る時代祭です。

この平安神宮は、1100年前前にできた平安京を偲ぶことができるように、入口の神門は応天門を模し、天皇が重要な儀式をなさった大極殿を少し小さくした形の拜殿が造られ、その東西に青龍樓・白虎樓を建てるなど、実によくできています。

こうして、将来の即位礼と大嘗祭を京都で行うことが決まり、しかも平安遷都1100年の記念諸事業が行われて、京都は往年の活気を取り戻すに至りました。

京都が本来の「ミヤコ」でなくなり、どん底に陥ったとき、先人たちは何とかしなければという気持ちで、いろいろな工夫や努力をされました。そのおかげで、京都の復活から繁栄につながっていった事実を忘

れてはならないと思います。

やがて大正4年（1915年）の御大礼も、昭和3年（1928年）の御大礼も、京都において盛大に執り行われました。その機会に、京都御所も御苑一帯も整備されましたが、それだけでなく、京都駅から北上する烏丸通も市内の敷設も一新されています。

大礼の際には、たとえば、今も京都は内外の観光客が急増してホテル不足だと言われますが、100年前の大正大礼には、ほとんどの皇室・華族をはじめ、政府要人・各界代表から、外国の大使・公使など、夫婦同伴で合計3千人以上も来られました。ですから、宿の手配のみならず、おもてなしをどうするかなど、あらゆる面にわたって大変だったようです。しかし、京都の人々は見事に乗り切ったのです。

大礼に直接関係するものとしては、即位礼の行われる京都御所の紫

宸殿で天皇陛下のお立ちになる高御座（たかみくら）と、皇后陛下のお立ちになる御帳台（みちょうだい）。また、その前面南庭に並ぶ大小の旗や、文武百官のもつ威儀物など、すべて京都の名工が作っています。

京都の「ミヤコ」機能に磨きを掛ける工夫と努力

このように大正と昭和の2回、御大札が京都で行われたことによつて、京都御所は正式に「京都皇宮」と称されるようになりました。「皇宮」というのは天皇のお住まいになる宮殿（ミヤ）ですから、それが東京の皇居だけではなく、京都の御所も天皇のお住まいとしての機能を回復した、それによつて京都は再び本来の「ミヤコ」になったのです。

それゆえに、天皇后両陛下と皇太子同妃殿下が京都へ来られますと、今なお原則として京都御苑内の大宮御所でお泊まりになります。い

さらに大嘗祭を行う大嘗宮は、かつて上皇のお住まいとしてあった仙洞御所の跡地に、悠紀殿・主基殿・廻立殿などが建てられました。その用材も建築も京都の職人さんが請け負い、立派に仕上げられています。

まの京都御所も大宮御所も、皇宮の一部となつているからです。

ところで今日は、「双京構想」の意味を考える場であり。けれど、すでに明治以降、天皇が東京（東の都）へお移りになつても、この京都（西の都）は大正・昭和の大札を行った実績により、都としての機能を取り戻し、その役割を果たし続けてきた、という重要な事実を再認識することから出発してほしいと思います。

前に述べたとおり、明治天皇のご叡慮で御大札を京都において行うこ

とが決定され、実際に大正・昭和両天皇の御大札が京都で行われたことは、京都が今なお「ミヤコ」としての機能を保持しており、さらに充実させていける可能性を確実に持っているという点で、極めて大きな意義があると考えております。

実は、昨年（2015年）大正4年の御大札から満100年を数えました。そこで私は、これを機会に、



「ミヤコ」としての機能を回復した大正・昭和の大札が持つ意味を、多くの人々に知ってもらうために、即位礼と大嘗祭に関する展覧会ができないかと思い立ちました。いろいろな関係者にお話したところ、幸い今年に入り、心ある方々から理解と応援をいただいて、何とか開催できることになりました。

それが9月10日から京セラ美術館



(伏見区：11月13日まで)と城南宮斎館(同：10月23日まで)で、「近世京都の宮廷文化」展覧会というテーマで開かれています。主に江戸時代を中心にして、明治・大正・昭和にわたる御大札に関する展覧会でございます。

この御大札が執り行われた意味は、京都にとって極めて重要だということ、ぜひ皆さまにもご理解い



ただけなら幸いです。市民生活の面でも、京都御所や御苑一帯だけでなく、京都市内の街並みが格段に整備され、伝統の中にモダンな雰囲気をも併せ持つようになったのは、大正と昭和の御大札を挙行するに当たり、緻密な計画の下に多くの予算を掛け、新しいまちづくりを進められたからだと思えます。

この京都は、決して過去の遺産(廃都)でもなく、単なる観光の対象(古都)でもありません。明治以降も、大正・昭和の大札を実施して「ミヤコ」の機能を回復した現役の宮都だということを、改めて強調しておきたいと思えます。

そうであれば、この「ミヤコ」としての機能を活用しながら、これに一段と磨きをかけるような工夫と努力を続けなければなりません。それが「双京構想」の現代的意義であり、また将来的課題だと考えております。

(基調講演終了)

パネルディスカッション

京都の宮廷文化と

双京構想の歴史的意義

パネリスト



京都造形芸術大学教授
五島 邦治氏



特定非営利活動法人
京都観光文化を考える会
都草 特別顧問
坂本 孝志氏



葵祭第61代斎王代
(平成28年)
西村 和香氏



京都産業大学名誉教授
所功氏

コーディネーター





◆**所** 京都のことは京都に生まれ育ち京都に長らく住んでいる人々が一番よく知っておられるはずです。しかし、まことに失礼な言い方かもしれませんが、「灯台下暗し」の諺どおり、京都の本当の良さは、案外と京都の中にいる人には分からない、ということもあるのではないのでしょうか。昔から日本全国の人々にとって、また今や全世界から来日する人々にとっても、京都は格別な憧れ

の場所になっています。

では、それほど多くの人々をひきつけてやまない京都の魅力とは何なのでしょう。それを探りながら、

京都にゆかりある私どもが、これから何を心掛けて、どう力を尽くしていったらよいか、皆さんとともに考えてみたいと思っています。

平安時代にタイムスリップ

◆**西村** 私は普段、実家である京漆器店の広報を務めています。今年5月に葵祭の第61代斎王代を務めさせていただきました。当日の写真を持ってまいりましたので、こちらを見ながら、その時の様子や感じたこととお話しいたします。

当日は、まず御所でお化粧、次いで着付けをしていただきました。白塗りは人生で初めての経験でした。昔、私の母親も斎王代を務めさせていただきました時も、お化粧の担当者とは同じ方だったそうです。「昔は額の左右に殿上眉（てんじょうま

ゆ）を描いていた」と母親が言っていたのですが、私の場合は本当の眉毛を生かす形で化粧を施していきましたので、少しずつ時代に合わせて変遷があるのだなと実感しました。

1時間ぐらいでお化粧は終わります。その後の着付けは、衣紋方と呼ばれる専門の着付け師3、4人で私を取り囲み、作業が進みます。装束は十二単（じゅうにひとえ）です。で、多くの衣を組み合わせて一つの着物になります。私はずっと立っているのですが、衣紋方の皆さんが1枚1枚丁寧に着せてくださる様子を

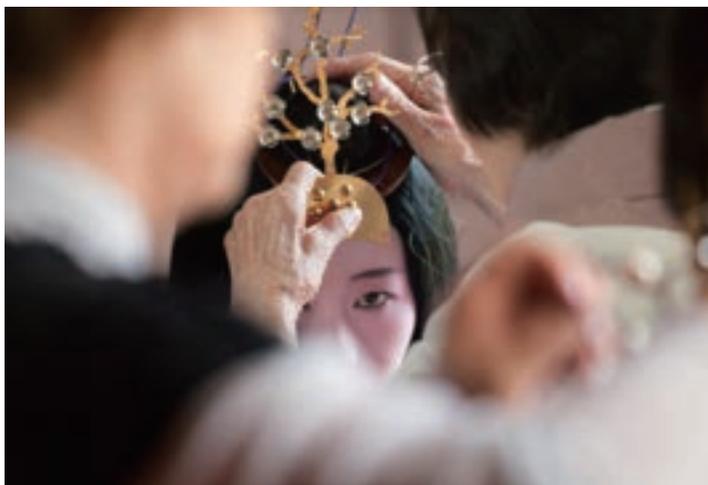


見ていて、大変そうと思うと同時に、とてもありがたく感じました。

私は十二単を着るのも初めてです。昔の織物はすごく重く、ずっしりとしています。身に付けると本当に子ども一人をおんぶしているぐらいの感覚で1日中過ごしていました。裾の長い長袴（ながばかま）を、重ね着した衣の下に身に付けるので、歩く時はすり足で進まざるを得ない状況でした。階段の上り下り

や、御禊の儀式で下鴨神社の御手洗池の水面に手をつける時は、集中力を高め、いろいろなところで力を入れて、転倒しないよう慎重に動いていました。

京都御所からの出発の際は、「行ってきなさい」と母親に背中を押されるような形で送り出されました。その瞬間は自分自身もすごく緊張していました。また、たくさんの方が出発を見守ってくださいっていて、衣紋方の方も「気をつけて」と声を掛けてくださいました。行列で近くに行ってくださいる女官役の方々からも「一緒に行きましょう」と言っていたとき、私の緊張をほぐそうとしてくださったことをうれしく思いました。下鴨、上賀茂神社への巡行中は、腰輿（およよ）と呼ばれる輿に乗った自分の目の前に優雅な行列が連なっており、きれいな行列だなど



ずっと思いながら見ていました。行列をなしている人たちの装束は、一人一人の衣装が違っており、もうちょっとゆっくり見たかったという思いもありますが、自分なりに目に焼き付けたつもりです。

下鴨神社の境内にある糺の森（た

だすのもり)を進んでいる最中や、市中で古い建築物などが残る風情ある一角を通り抜ける時は、平安時代にタイムスリップしたのではないかと見たがうくらいで、深く印象に残っています。

京都に根付く王朝文化

◆五島 宮廷文化というと私たちにとっては遠いもののように思えます。伝統文化とか京都文化といわれるものともまた違ったイメージがあります。

日本文化の中で宮廷文化といわれるものがどんな位置にあるのか、その考えるきっかけとして三月三日桃の節句の、ひな人形について考えてみたいと思います。内裏雛(だいらびな)といわれるように、ひな人形は天皇・皇后とのお住まいである皇居(内裏)のようすを模したものです。現代のようなひな人形は、江戸時代に広く一般に広まったとされ

ますが、当時の人にとっては天皇や皇居といったものはやはり憧れだったでしょう。

現代の五段飾りといった立派なひな飾りは、男びな・女びなという一対の人形に、お仕えする女性である三人官女、能のおはやしを奏でる5人の樂人を表した五人ばやし、左近衛府・右近衛府(左近の桜・右近の橘はここからきています)と呼ばれる兵団の長官である左右大将などで構成されています。宮中の儀式などでよく演奏されるのは雅楽です。で、能の樂隊がひな人形に加わっているのは不思議に思われるかもしれ



ません。実は室町時代、3月の左近の桜の咲く季節に、天皇は皇子や皇女、そのなかには他家に嫁いだり、出家して門跡寺院に入った人たちもおられますが、そうしたお子達を御所に集めて、宴を催し、能をご覧に



なっていたのです。公式行事ではないのですが、宮中の遊びとして江戸時代までつづきました。

ここで演じるのはプロの能楽師ではなく、京都の都市民（町衆）の中で能楽に熟達した人が選ばれます。当時、京都では能を舞ったり謡を謡ったりすることが流行して、それが一つの町衆の教養でもあったのです。これを手猿楽といえます。そうした彼らを選んで能を舞わせるので



ですが、反対に町衆の中では内裏で能を舞うことが一種のステータスにもなるのです。京都の町衆文化と宮廷の関係性を考えるとき、こうした事実は大きなヒントになるのではないかと思います。

現在の京都御所は平安時代の内裏と同じ場所ではありません。西暦960年にはじめて燃えてから内裏は里内裏として場所を転々とし、南北朝時代に現在の場所に定着します。その当時の御所はかなり荒廃していました。ふつうの住宅をそのまま内裏として用いたりしました。この頃、諸国の戦国大名は、天下を狙って上洛を目指そうとしますが、同時に京都文化を積極的に吸収しています。たとえば国宝の狩野永徳が描いたとされる「洛中洛外図屏風」は織田信長から上杉謙信に贈られたといわれています。これも、京都への強い関心を示すものの一つです。そのいっぽうで織田信長は、御所の再建にも積極的に取り組んでいます。戦国大名が内裏の再興に力を入れるのは、宮廷文化が京都文化の基盤をなすと考えていたからでしょう。



文化とは、単独の文化の分野で成り立っているものではありません。時代の変遷とともに積み重なって重層的な構造をしています。そのなかであきらかに基調となっている文化があります。代表的なのは王朝の和歌

文学です。「源氏物語」もその中に入ります。そのあとでは能楽があります。茶道もそうでしょう。京都の文化というのは、そうした和歌文学を基調としてその上に能や茶道を積み重ねてこれらを核にしたものです。町衆たちはそうした文化を吸収して、さまざまな意匠を作り、次々に新しい作品を創り出してきたのです。宮廷文化もあきらかにそうした基調文化の一つです。

悠久の歴史に感動

◆坂本 NPO法人「京都観光文化を考える会・都草」は、京都大好き人間の集まりです。現在は380人ほどの会員がおり、そのうち約100人は京都在住者以外の会員です。京都を学問的に探求しようという基本姿勢はありますが、それだけでは

京都三大祭の一つ、祇園祭の山鉾は、建築や染織、工芸などの総合文化です。これ自体は宮廷文化ではありませんが、こうした工芸品を作った職人は十分に先にお話ししたような古典的な基調文化を踏まえていたとみるべきでしょう。

宮廷文化はそんなふうには京都の都市の人々にも根付いており、それが京都の文化のブランドを作ってきたのだと思います。

なく、京都に深く入り込んで、体感、体験することも重要だと考えて活動しています。

祇園祭には150人ほどのボランティアを派遣してお手伝いをし、毎月30人くらいで神社や寺院での清掃作業もしています。作業が終わった



後、宮司さんやご住職さんから観光客向けとは違ったお話を伺えるのが楽しみです、そのような活動を続けています。さらに京都御苑のガイドツアーを毎週日曜日に開催しています。京都御苑内の閑院宮邸跡前に午前10時に来ていただければ、無料でご案内をさせていただきます。

京都御苑は国が管理する国民公園です。自然豊かで、樹木は約5万本あり、80種類ぐらいの野鳥が確認さ

れています。キノコ類もたくさん自生、チョウも多く生息しています。御苑内の景観を特徴づけるものに白い砂利道がありますが、これは滋賀県の安曇川流域の砂利を使っています。建礼門前にも砂利道があり、ここは大正天皇ご即位の際に拡張整備された名残です。

京都御苑を歩いていても、今日のテーマである宮廷文化に関する何かを目にするということは少ないのですが、ここは南北朝時代に現在の御所が移ってきて、歴史的な出来事が繰り返された場所ですから、当時の様子や古人の営みに思いを巡らせ、楽しみながらガイドをさせてもらっています。

先ほどからお話に出ている展覧会「近世京都の宮廷文化」にも、受付や監視員のボランティアとして都草の会員が関わっており、私も週2、



3回会場に行っておりました。会場の一つの城南宮には、大正天皇の即位礼の会場を再現した10分の1の模型を展示。紫宸殿や、その裏側には高御座もあり、非常に精巧な模型です。もう一方の会場である京セラ美



術館には、江戸時代前期に在位した東山天皇のご即位の様子を描いた屏風や、徳川家康の孫で、後水尾天皇に入内し、朝廷と武家を結ぶ役割を果たした東福門院（徳川和子）の像などが展示されました。

東京の皇居で行われた今上天皇の



即位礼では、現在も京都御所紫宸殿

文化の中心地は京都

◆所 西村さんは、お母さまがご奉

仕なさったところと、今回を比較して若干違ったところもあると言われま

にある高御座を使いました。即位礼

の会場模型が並ぶ会場にあります

と、高御座を分解し、空輸して皇居

の会場に運び、即位礼が終わった後

には京都に戻されたというエピソード

を思い出し、皇位継承という儀式

が一目でよく理解でき、整然と儀式

が進む様子が思い浮かぶので、悠久

の時間を一瞬で飛び越えるような感

覚になります。来場者の方も、ここ

にいるとすごく気持ち安らぐと

おっしゃる方がおられます。

皆さん、連綿と続く皇室の長い歴

史そのものに感動されるのではない

でしょうか。

した。そういう違いも踏まえて、齋

王代をお受けになると決まってい

ら、どんな心掛けでご準備をなさ

てこられたのでしょうか。

◆西村 斎王代のお話をいただいてから時間を置かず御禊の儀があったのですが、神事ですので当日までは練習などは何もないのです。母親からは、まず気持ちをしっかりと持つことをアドバイスされ、健康管理な



ども含めていろいろ教えてもらいました。天皇家のお嬢様やお孫様の代理でご奉仕するのが斎王代です。で、気持ちを落ち着け、りんとした表情で、しっかりとお役目を果たすということ、御禊の儀などの前儀から本番当日までの期間中、ずっと心掛けてきました。

◆所 五島先生は、祇園祭に触れられ、宮廷文化と切っても切れない関係があるというご指摘でしたね。

◆五島 祇園祭の起源は平安時代にさかのぼります。その後南北朝時代ごろになって、山鉾が登場し、町衆たちが受け継いできた祭りです。室町時代になりますと天皇や上皇、将軍も祇園祭の山鉾を見物したいと希望されるようになります。そんなときは下京の町の人たちが山鉾を、御所のある上京まで曳いて行ってお見せしたそうです。天皇は、それを

見るためにわざわざ皇居の築地塀を壊されたとのエピソードも残っています。

◆所 坂本さんからも、多くの有志と活動をして来られて気づかれたこ





と等、何か補足がありましたらお願いいたします。

◆坂本 私たちは、所先生にもお越しいただいて、双京構想の勉強会を行ってまいりました。双京構想の進についてまだ具体的に活動しているわけではありませんが、今後、何



かお手伝いができないかと考えているところです。

◆所 京都御所に御物（ぎよぶつ）の図書館があることをご存じでしょ

明治改元から150年を機に新展開を

極めて個人的な意見を述べることをお許しいただきたいのですが、私は天皇陛下に京都へ戻ってきていただきたいと思っております。これは京都のためだけではなく、日本の国の在り方として重要なことです。経済・政治は東京が中心ですが、文化の中心地は京都が担うというのは極めて自然の流れではないでしょうか。もし双京構想が具体的に進むようであれば、大事なものは国民、とりわけ京都市民が皇室の方々に対して「ぜひお戻りください。喜んで歓迎します」という気持ちを表すということではないかと思っております。

うか。正式には東山御文庫と申しませす。ここには皇室に代々伝えられる



大変貴重な超国宝級の古文書や古絵図などが収蔵されています。毎年10月下旬から11月上旬にかけて虫干しも行われますが、「勅封」と言いまして、天皇のお許しが必要なければ開けることができません。奈良の正倉院も同じ制度で管理されています。



その東山御文庫の収蔵品を一般に公開することは不可能ですが、その複製品やデジタル画像などを広く見ていただける機会を作っていました。たら、ありがたいと思っています。あの15代将軍から明治天皇に大政が奉還された翌年（1868年）、



「明治」と改元されてから再来年（2018年）で満150年となります。その明治元年3月、明治天皇のもとで新政府の基本方針「五箇条の御誓文」が発表されました。その誓約儀式は、京都御所の紫宸殿に天神地祇を祀り、明治天皇の前



で、三条実美が五箇条の国是を読み上げ、神々に新しい国の方針を誓った。この御誓文に、当時の公家や武士の役人など約750人の署名したものが残っています。「広く会議を興し万機公論に決すべし」で始まる五箇条の国是を、日本国中の神々に

誓って、実現を誓っているのです。

その750人も署名した誓紙の原本が東山御文庫に保管されております。来年から再来年にかけて「明治維新150年」の節目に、この誓紙をせめて複製でも広く見られるようにしてほしい。そうすれば、「五箇条の御誓文」が決して上意下達の命令文ではなく、当時の為政者や実務官人たちが神々に誓った誓約文であり、だからこそ、この新しい方針をみんなで協力して実行に移していただくことが広く理解していただけるのではないかと思います。

また、幕末までの御所周辺には、四親王家と呼ばれる皇族方や、五摂家など公家のお屋敷が立ち並んでいました。明治に入り多くは東京へ移られ、お屋敷はほとんど取り壊されてしまいました。しかし、幕末当時の京都が都として繁栄していた様子

を、全国から修学旅行で京都を訪れる小・中学・高校生たちにも分かるように、立体的な展示やバーチャルな映像で復元する試みも必要ではないかと考えています。

ちなみに、大正天皇の御大礼の行われた直後の大正5年、京都教育会が京都市内にある幕末から明治にかけての史跡に、「坂本龍馬遭難の地」などの石標をたくさん建立しました。その大部分が今も残っています。今や海外からの観光客も多いのですから、それに外国語も交えた分かりやすい説明板を整備してほしいと思います。

このほど、文化庁の京都への全面移転が決まりました。20年前には誰も予想できなかった快挙です。それは京大名誉教授（臨床心理学者）の河合隼雄先生が平成14年（2002年）文化庁長官に就任され、長官の

分室を京都国立博物館に置かれたことが契機となり、文化庁移転の機運が高まり、今回の決定につながったのです。

この夏、今上陛下が高齢を理由に退位の御意向を表明され、いろいろ議論されております。そのために法の整備が進めば、おそらく3年以内に（平成31年初めか）、今上陛下の代わりがあり、それに伴って、必ず新天皇の即位礼と大嘗祭が執り行われます。

それが大正・昭和天皇の時と同じように両方とも京都で実施されることは難しいかもしれません。平成2年には、百数十の国々からたくさんのお客様がお越しになりましたから、即位礼は国の儀式として東京で挙行される可能性が高いと思われま

す。けれども、せめて皇室行事の大嘗祭は、夜分の神事でもありますか

ら、静かな京都御苑内の仙洞御所跡地でやってほしいと考えています。

この案は、平成の初めに京都商工会議所会頭の塚本幸一さんが中心になり、大阪・神戸の商工会議所とともに政府へ強く要望されたこともありませんが、残念ながら警備上の理由などで採用されませんでした。

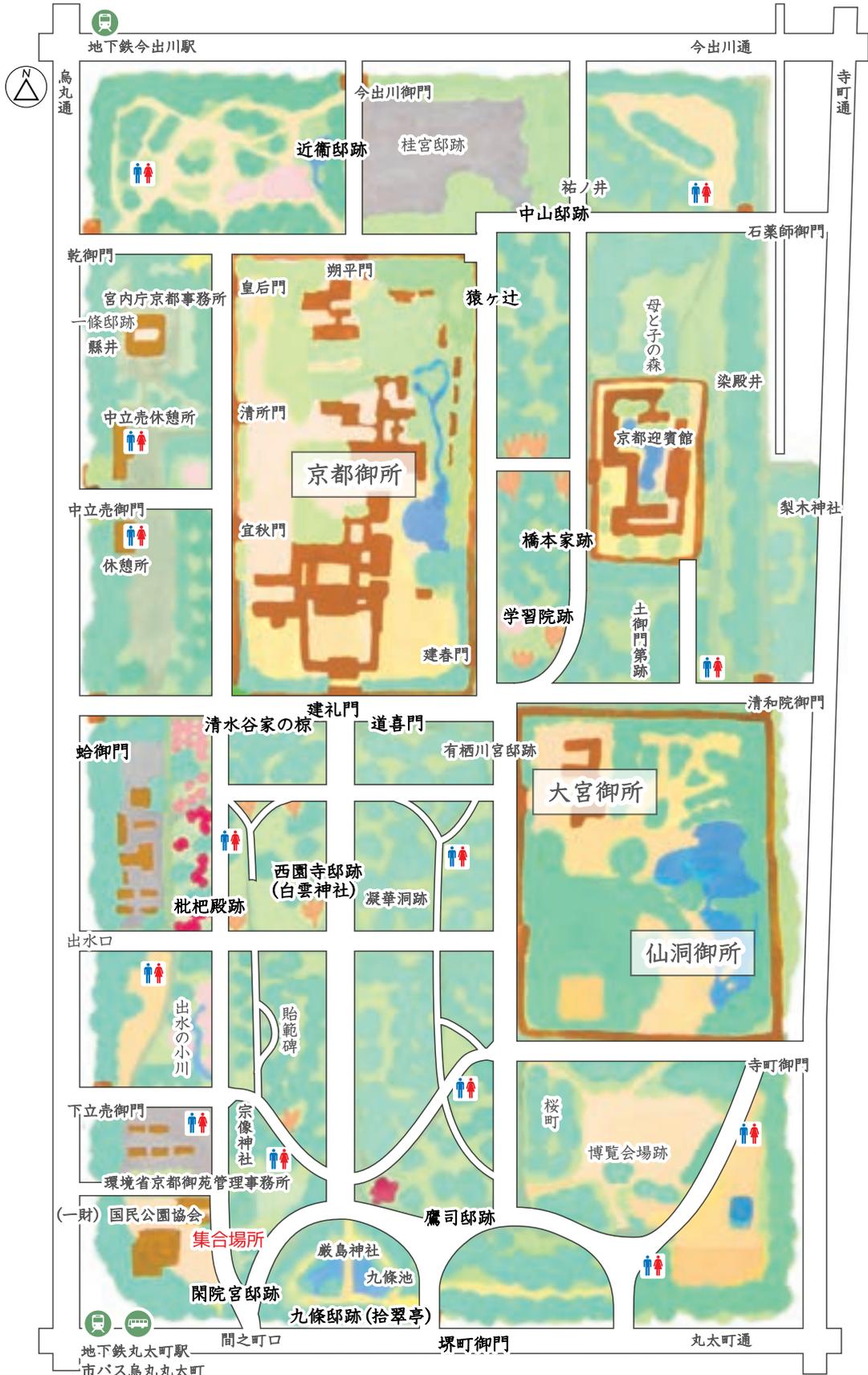
今後、さまざまな議論や課題はあると思いますが、過去2回、御大礼が京都で行われた実績を踏まえ、何とか次の大嘗祭は京都で実施されるよう道筋をつけていただきたいと念願しています。

数年前から提唱されている「双京構想」を、決して絵に描いた餅で終わらせないために、この構想を私どもが身近な課題として認識するとともに、宮廷文化を京都らしい儀典文化として国の内外にアピールすることが大切ではないかと考えます。そ

の一環として、明後年（平成30年）には、京都市などのお力添えをいただいで、近代大礼の大々的な展覧会を開催したいと思います。

（終了）

京都御苑歴史散策マップ



出典: 京都御苑歴史散策マップ (NPO法人 京都観光文化を考える会・都草 作成)

双京構想とは

皇室の弥栄のために、京都にも皇族の方にお住まいいただき、東京との双京を実現する構想です。

なぜ双京構想を目指すのか

東日本大震災を一つの契機として、東京にあらゆるものが集中しているわが国のあり方が問題とされています。首都直下型地震発生リスクが一層高まる中、万が一の事態に備えて、首都中枢機能のバックアップ体制を早急に構築することが求められており、とりわけ、日本の精神的支柱である皇室の安心・安全の確保について、万全の体制を整えておくことが必要です。

また、京都は、千年の間、天皇がお住まいになり、宮中文化が生まれ、今もなお、日本の歴史・文化の中心として多くの人々を魅了し続けています。京都が、日本人の心と文化を体現する

もう一つの首都として、日本の伝統や文化を守り育てることが、バランスのとれた豊かな国づくりに必要です。

京都と皇室の歴史

京都は、東京以外に全国で唯一御所を有し、千年の間、天皇がお住まいになり、宮中文化が育まれてきました。明治初頭に天皇が東京に移られてからも、旧皇室典範に即位礼・大嘗祭を京都で行う様に定められ、京都において宮中の儀式が行われていました。戦後の皇室典範の改正に際して、京都で即位礼・大嘗祭を行うという規定は無くなりましたが、天皇皇后両陛下によるお茶会が開催されるなど、今日においても、皇室と京都の関わりは続いています。

ます。

目指すべき姿

皇室の方々がご出席される国際会議や宮中行事の京都での実施などにより、皇室の方々が京都へお越しいただく機会を増やし、1週間、そして1か月間という長期のご滞在へとつなげ、将来的にはお住まいいただくことを目指します。

京都における取組

双京構想の実現に向けては、一つ一つ実績を重ね、京都にお住まいいただける環境を整えていくことが大切です。そのため、具体的に以下の取組を進めます。

①「京都の未来を考える懇話会」メンバーをはじめ有識者などによる双京構想の

発信や講演会の開催などあらゆる機会を捉えて、京都内外で双京構想の実現への機運の醸成を図っていきま

す。
②景観資産の保全・再生・創造、歴史的風土の保存・活用などにより京都市らしい品格を高める取組を推進し、皇室の方々をお迎えするにふさわし

明治以降に京都で実施された皇室行事

◆大正天皇、昭和天皇の即位の礼・大嘗祭

▽即位の礼

天皇が位につかれたことを公に告げられる儀式。皇位の継承があったときに行われる様に定められています。

▽大嘗祭（だいじょうさい）

天皇がご即位の後、大嘗宮の悠紀殿（ゆきでん）・主基殿（すきでん）において初めて新穀を皇祖・天神地祇に供奉られ、自らも召し上がり、国家・国

いまちづくりを進めていきます。

③皇室の方々をご出席される国際会議をはじめとする様々な催しが京都で開催されるよう取り組むとともに、「京都の未来を考える懇話会」など各種団体から、政府に対し双京構想の実現に向けた取組を要望していきます。

民のためにその安寧と五穀豊穰などを感謝し祈念される儀式。

◆お茶会

平成2年、即位礼及び大嘗祭の後、天皇皇后両陛下の京都への行幸啓の際、古来皇室にご縁故の深い近畿地方の各界の代表等を招いてお茶会が開催されました。また、平成11年、21年にも、ご即位10年、20年の記念行事として京都にてお茶会が行われました。そのほか、昭和56年に京都でお茶会が行われています。

「双京構想」は、京都の行政、産業、大学、文化・観光、メディアのトップが、30年後の京都の「ありたい姿」を自由に語り合い、オール京都で、府民、市民が一緒に目指したいと思う未来像を描くことを目的に、平成22年4月に設置された「京都の未来を考える懇話会」の議論の中で発表したものです。

日本の大切な皇室の弥栄、そして、わが国の伝統を守り、文化を発展させるため、皇族の方々に京都にもお住まいいただき、政治・経済の首都である「東京」と、歴史・文化の首都である「京都」の双方で、わが国首都としての機能を果たし、日本創生を実現させることを目指すものです。

●「ご即位・立太子・成年に関する用語」（宮内庁）（<http://www.kunaicho.go.jp/word/word-sokui.html>）を加工して作成
●「ご即位・大礼の主な儀式・行事」（宮内庁）（<http://www.kunaicho.go.jp/20years/20kiroku/sokui-01.html>）
●「地方へのお出まし（都道府県別）」（宮内庁）（<http://www.kunaicho.go.jp/about/gokomu/odemashi/rocal/rocaldata-02.html>）を加工して作成

シンポジウム

「京都の宮廷文化と双京構想の歴史的意義」

・平成28年10月8日（土）午後1時30分～3時30分

・キャンパスプラザ京都5F第1講義室

・主催：双京構想推進検討会議（京都府 京都市 京都商工会議所）

プログラム

①基調講演 「京都の宮廷文化と双京構想の歴史的意義」

所功（京都産業大学名誉教授）

②パネルディスカッション 「京都の宮廷文化と双京構想の歴史的意義」

パネリスト

五島 邦治（京都造形芸術大学教授）

坂本 孝志（特定非営利活動法人京都観光文化を考える会・都草 特別顧問）

西村 和香（葵祭第61代齋王代（平成28年））

コーディネーター

所功（京都産業大学名誉教授）

開催概要

京都は、千年以上もの長きにわたり都として栄え、宮中文化が育まれてきました。東京の皇居以外に唯一現役の御所があり、江戸時代にも、御所を中心に宮廷公家社会の文化が継承され、発展を遂げています。

こうした京都の宮廷文化を通して、東京と京都の双方でわが国の都としての機能を果たす「双京構想」の意義について、参加者の皆さんとともに考えるシンポジウムを開催しました。

この冊子は平成28年10月8日（土）に開催しましたシンポジウム「京都の宮廷文化と双京構想の歴史的意義」の採録の概要を、双京構想を理解していただくための参考としてまとめたものです。



発行：双京構想推進検討会議（京都府 京都市 京都商工会議所）
平成 29 年 3 月
